

## 札幌自由が丘学園スタッフのエッセイ集（2005.4.7～6.22 . N01-15）

1	一期一会（1）	亀貝一義	2005.4.7
2	学校の主人公は誰？	亀貝一義	2005.4.17
3	71の手習い	芳賀 慈	2005.4.22
4	文科省からの要請	亀貝一義	2005.4.27
5	『対抗心』	田房絢子	2005.5.7
6	東京旅行	芳賀 慈	2005.5.19
7	ふるさと銀河線	木村玲子	2005.5.20
8	親の心、子どもの心	亀貝一義	2005.5.24
9	靖国神社	亀貝一義	2005.5.29
10	徒然草（「改革」の話）	亀貝一義	2005.6.1
11	徒然草（「序段」）	亀貝一義	2005.6.4
12	内村鑑三と宮沢賢治	山城俊昭	2005.6.5
13	徒然草（「友だち」の話）	亀貝一義	2005.6.10
14	歴史の話（「ジンギスカンは義経」？）	亀貝一義	2005.6.18
15	「アイムソーリー」の授業から	木村玲子	2005.6.22

### 1．一期一会（1） 亀貝一義（学園長 / 社会・国語担当） 2005.4.7

3月9日の朝日新聞朝刊（全国版）に、オーサービジット授業（作家・漫画家の折原みとさん）の記事が載りました。この中に学園紹介として代表名も記されていました。翌日本州のある人から「ひょっとしたら札幌北斗高校にいた先生では」という電話がかかってきて、しばらくは電話で昔話のひとつときを過ごしたのですが、かつてその高校で大学を出てから30年間、1990年まで勤めていたたくさんの方の卒業生を出したり、思い出がたくさんあります。

今の非常勤スタッフで、私の過ごした高校と関係がある人が3人もいます（美術のMさん、理科のYさん、国語のRさん）。NPO賛助会員になってくれている人も何人もいます。

また、そのころ知り合った他の学校の先生方から「あの人がやっている札幌自由が丘学園なら信頼できるかも」といって生徒の転校先の候補校として父母に言ってくれることもあります。それなりに真剣に教育と学校について取り組んできたと自分では自負していましたが、そういういくつかのことに触れるとあらためて教育の意味を考えます。そして同時にこの人とのふれ合いは、昔からいう「一期一会」そのものでもあります。

### 2．学校の主人公は誰？ 亀貝一義（学園長 / 社会・国語担当） 2005.4.17

ライブドア関係の話が出てきてから「企業は誰の物か」というテーマが言われてきた。これについて思い出すのは、かつて「学校の主人公は生徒」という言葉が新しさをもって言われていたことだ。この主人公という語は、別に言えば「学校で生徒が一番大切にされるべき」ということだし、逆にいえ

ば学校で生徒たちが大切にされていなかったことでもある。

私は、かつてこれらに関連して「学校の主人公は教師だ」といったが、響響（ひんしゆく）をかったようだ。しかし、「学校の主人公は生徒」というのは当たり前である。いわずもがなであろう。問題はどうかしてこれを保障するかである。生徒たちの意見や気持ちや要求が大事にされるか、は結局はその学校の教師たちが相互に大切にされ、それぞれの役割が評価されているか、と密接に関連する。一定の組織・団体がいきいきしているか、はこれを構成するメンバー（学校でいえば教師（スタッフ））が生き生きしているかの裏表の関係である。

企業は、これを構成する社員が最もいきいきしていて初めて株主や社会に貢献されるということである。そんなことを先日（4月10日）のテレビ朝日で、田原総一郎氏とアメリカのGoogleの創業者との対談を見て思い出した。結局、学校の主人公は生徒であるが、これを保障するのはスタッフ（教師たち）であり、同じ立場にいる父母だといえるであろう。

### 3.71の手習い 芳賀 慈（フリースクール部主任／保健・生活教養担当） 2005.4.22

家に帰ると、見慣れた雑な字で私の名前を書いた茶封筒が届いていた。父からのものである。中身は新聞が一枚。付箋すらついていない。「学びたい気持ち一心」というタイトルで、ある大学の一般公開講義を取り上げた記事があった。

学部1年生が対象のその講義を、今年是一般にも公開すると受講者を募ったところ、60代を中心に23人が申し込んできたそうである。その初日の風景に、父がアップで写っていた。おまけに「学びたい一心で申し込んだ。教養にもなるし、自転車で通うので健康維持にも役立つ」などとコメントが載っていた。彼は71歳。今さら何を学ぶというのか。

しかし確かに健康には良さそうだし、もしかしたら周りの学生を少しは刺激したりする大役を果たすかもしれない。家に寄り付かなかったあの数年を思い出し、久しぶりに帰ってみようかという気になった。何を学んでいるのか、少し興味もあるし。

### 4.文科省からの要請 亀貝一義（学園長／社会・国語担当） 2005.4.27

昨日、文科省から「教育・青少年育成分野で活動するNPO法人関係者との懇談会」を企画するので参加するようにという要請を受けた。

その趣旨は、一定の実績のあるNPO法人等が、不登校等対応の学校教育の分野や放課後の地域社会の分野、その他で取り組んでいる活動を、今後の施策推進に参考にしたい、ということである。

私たちの長年の活動が、一定の評価を受けたということと、文科省等国の教育行政の担当者自体、教育政策推進で多様な意見と実践を受けとめる必要性を感じているのだということを知った。私たちもいろいろ検討して、2人が参加することにした（亀貝、芳賀）。文科省側は下村政務官などが参加する運びとなっている。

学校が、「学力向上」をめざして競争する方向を強めてきているが、今後、「飛び級」に示される“優等生”が生まれるだろうが、反対におちこぼれやその他の校内問題が大きくなることも予想されるのである。そしてまた将来「学力偏重の教育の矛盾」も自己批判することになるだろう。だから、文

科省も、学校に出向いて教職員や保護者、児童生徒の生の声を聴くスクールミーティングを実施したり、NPOの活動を評価したりしながら、多様な(上の優等生教育だけでなく)教育のあり方を模索しているのではないかと、思ったりもする。

その懇談会で、全国で草の根の教育活動を(子どもたちとともに)進めているNPOなどの人たちと交流しながら私たちのテーマもまた再確認したいと考えている。

#### 5. 『対抗心』 田房 絢子 (高等部2年担任 / 英語担当) 2005.5.7

英語。人よりもずっとずっとがんばろうと、選んだ言語。

思い返してみれば、始めたきっかけは姉に対抗して、というのが本音だろう。中学の時に、姉は地下鉄に乗って英会話教室に通った。小さい頃から、とにかく姉には負けたくなかった。私も中学で英語教室に通い始め、高校では英会話を始め、卒業後には専門学校で英語を学び、そして留学、無事卒業もした。姉は短大の英文学科を卒業したのだが、今では英語のえの字も忘れてる。

こうして見ると、いつの間にか姉を越えてしまったのだが、別に優越感もなにもない。結局ここまで来られたのも、姉への対抗心から始まったとはいえ、やっぱり英語が好きなのだろうということ。そうじゃなかったら、15年もの間続けてきていないし、向上心もゼロなはず。きっかけなんて、最初の一步に必要なだけ。そう考えたら、ほんとに好きになれるものってどこに転がっているかわからない。

そろそろ違うものも、探してみようかな。

#### 6. 東京旅行 芳賀 慈 (フリースクール部主任 / 保健・生活教養担当) 2005.5.19

東京行きの飛行機は、飛び立ってちょっと新聞など読み、サービスのスープを楽しんでいると、もう着陸態勢に入る。札幌からなら十分に日帰り圏内だ。

16日、文部科学省主催の懇談会に出席してきた。会には全国のフリースクールや子どもたちの放課後活動に取り組む団体、自然体験活動を進めるNPO法人など21組織の40名ほどが参加していた。それぞれの取り組みや子どもたちの現状、地域との関わりや行政との連携などテーマは多岐に渡り、一つひとつについて政務官など担当が答えたりコメントしたりという形で進められた。

会は3時間で終了し、すぐ帰途につく。列をなす車と急がしそうに行き交う人たちを眺めながら、ふと大阪に暮らしていた頃を思い出した。ゴミゴミした街と騒々しい関西弁の中で「その他大勢」として過ごせる心地よさが気に入っていた。誰も私に関心など向けない。面倒なことがなく、何となく暮らせる街だった。

今はしっかりとひとつの役割の中で生きている。新しく家族も持った。何かあれば、きっと少くない人が私に関心を寄せてくれるだろう。そんな面倒な毎日を、今はとても心地よく感じている。

#### 7. ふるさと銀河線 木村 玲子 (高等部 / 国語担当) 2005.5.20

道東の北見と池田を結ぶ線、通称「ふるさと銀河線」が存続の危機にあると知ったときから、一度ぜひ乗ってみたいと思っていた気持ちに火がついて、3月末の休みを利用して行ってきました。我がふるさと“留辺蘂(るべしべ)”の近くを走っているのに乗ったことがなかったのです。

広々とした十勝平野の雪どけの景色をたっぷり堪能してきました。だんだん山が迫ってきて、「よう

こそ、日本一寒い街りくべつへ」の看板が目飛び込んできた時、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」の一節が聞こえてくるかのようにでした。

置戸（おけと）駅からは高校生がどよどよと乗り込み、静かだった車内が一気ににぎやかになり、更に訓子府（くんねっぷ）駅からも大勢の高校生が乗り込むと、座る場所もないくらいいっぱいになりました。しかし、それまではたった一両の車両に4, 5人から10人くらいのお年寄りや年配者が入れ替わり立ち替わりという寂しい乗り降り。これでは赤字もやむを得ないなあ、という思いにもとらわれました。

赤字の責任を住民に押しつけて、民間の再建案を考慮しない、北海道新幹線ばかり声高にいう道の姿勢も問題ですが、もっとみんなが利用できるような対策を立てなければ、廃止反対の運動も難しいなあ、なんとかならないのかと焦るような思いでもいるのです。

#### 8. 親の心、子ども心 亀貝一義（学園長 / 社会・国語担当） 2005.5.24

先週、F Sの父母懇談会が20日に、H Sの父母役員会が21日に開催され、役員改選等を経て懇談が行われた。若干の飲み物もあったせいで、実に楽しくしかも率直な意見交換であったことに私は感心もした。

23日、生徒たち企画の第3回目の「ディスカッションの集い」が行われた。今回のテーマは、「人間関係を考える」ということだったが、まず身近なものとして「親との関係」が最初のテーマとなった。

かつて父母たちの話の中で「子どもの不登校は私たち夫婦の子育ての誤りだったのでは」といった後悔や反省の声が大きかったが、今はむしろ子どもの生き生きとした姿に接して嬉しい、という気持ちが出た。

子どもたちは「自分が今こうして楽しく元気に過ごすことができるようになったのは親のおかげ」と誰もが口にするのである。そしてどの子も「親には感謝の気持ちがいっぱい」という。「お父さんやお母さんに、その有り難うをいうのか」と聞くと、そんなてれくさいことはいえない、とのこと。親の心も、子どもの心もけっこう通い合っているのだ、としみじみと思うのである。これも子どもが不登校であったり、高校を中退した結果による効果であるといえるのであろう。

#### 9. 靖国神社 亀貝一義（学園長 / 社会・国語担当） 2005.5.29

ここ1年非常に気になるテーマに「靖国神社」問題がある。私自身は靖国神社に親近感をもっている。私の父が戦死して、ここに祀（まつ）られているから（神社に確認した！）。しかし近隣諸国が、日本の首相その他大臣たちを「私たちが苦しめた戦争犯罪人を祀る神社にどうしてお参りするのか」と批判していることを考えたとき、お参りしたいのなら『公人』を辞めてからにしたらどうか、と思うのは私だけだろうか。

小泉首相は「罪を憎んで人を憎まず」という中国の先哲の言を引いて靖国参拝を理由づけしているが、「己の欲せざるところを人に施すなかれ」という言もある。人がいやがることをやってはいけない、ということでもある。

かつて公式参拝をした政界の長老ともいべき中曽根康弘元首相は、1986年8月15日次のように言って公式参拝をやめた。「侵略戦争の責任を持つ特定の指導者が祀られている靖国神社に公式参拝することにより、貴国（中国）をはじめとするアジア近隣諸国の国民感情を結果的に傷つけることは、避けなければならないと考え...」。このことを、現首相や日本の指導者がぜひ踏襲してほしいと希望したい。

日本の古典の中で「徒然草」は非常に好きなもののひとつです。学校でも家ででもいつも近くに文庫本があって、文字どおりつれづれなるままに手にします。おりにふれてこのページで兼好の教えを受けてエッセイめいたことを記してみようと思います。

有名な「序文」を除いて、長短243の話があります。この中で一番短いのが第127段で「改めて益（やく）なき事は、改めぬをよしとするなり」。たったこれだけです。要するに「改革だ改革だといっても大して意味のない改革はしない方がいいんじゃないか」という意味ですね。

700年ほど以前、兼好の生きていた時「建武の新政」という後醍醐天皇の『改革政治』がありました。ちょうど彼が50歳前後のころだったと思われまます。兼好は、後醍醐天皇に反対の立場（北朝系）だったからかどうか分かりませんが、皮肉でもあるし、またうがった見方ですね。ご存じのようにこの新政はまもなく失敗しました。

今の世でもあまり意味の分からない「の改革」に触れたときに、兼好のいうことに「もっともだ」と共感の声をあげたくなりますが...？。

今日では誰もが知っている徒然草の冒頭の文句、「つれづれなるままに...そこはかたなく書きつくれば、あやうこそものぐるほしけれ」についてである。この「あやうこそものぐるほしけれ」の解釈をめぐる高2の生徒たちと話し合った。私は「妙に心が高ぶるのだ」がベターだと思うのだが、本によってはそれこそ妙に違うのである。

基本的なテキストともいべき岩波文庫（西尾実・安良岡康作校注）では、「妙にばかばかしい気持ちがある」とあり、佐藤春夫「現代語訳」（河出文庫）では「変に気違いじみたものである」と記している。またネット上で公表している吾妻利秋氏は「どうしようもないことをうだうだと書き残しているうちに、なんとなく変な気持ちになってしまった」と記す。

兼好さんは、いろいろ心に浮かんできたことをとりとめもなく書いていくと、「ばかばかしくなる」か、「気違いじみてくるか」、はたまた「変な気持ちになってしまう」か、そして「妙に心が高ぶる」か、どれが一番フィットするだろうか。

わが愛すべき生徒諸君の理解は、言わずもがなである。

私は、若き日に影響を受けた内村鑑三の著書「後世への最大遺物」の英訳に挑戦、本は和文付きで、札幌の柏船舎から、近々出版される予定です。（詳しくは、私の[ホーム・ページ](#)でご覧くだされば幸いです。現在予約受け付け中です。

過日、「宮沢賢治の童話を読む会」という会合に出ました。賢治は、あの有名な「アメニモマケズ」の詩の作者です。私は、彼自身がモデルで、こんな考えの青年教師がいたのだとずっと思い込んでいました。しかし、講師の方から、彼は裕福な岩手の質屋の息子だと聞いて、驚きました。この話を岩手県出身の方にしましたら、あの詩のモデルは齊藤某という実在した人物がモデルで、その人は内村鑑三に私淑していたクリスチャンだと伺いました。鑑三と賢治、思わぬところでつながっていたのでした。

もっとも、賢治はキリスト教ではなく、日蓮宗に強く影響を受けた人でした。私が子供の頃は、日蓮宗の信者の寒修行が盛んで、「ドンブクが来た、ドンブクが来た」と子供心に不思議に思ったものでした。あの日蓮宗です。賢治が日蓮宗に何故惹かれたのか、新たな興味が湧いてきました。

「徒然草」の第117番目にある話です。「友とするに悪き者、七つあり。一つには、高く、やんごとなき人。二つには、若き人。三つには、病なく、身強き人、四つには、酒を好む人。五つには、たけく、勇める兵。六つには、虚言する人。七つには、欲深き人。

よき友、三つあり。一つには、物くるゝ友。二つには医師。三つには、智恵ある友」。

これを現代風にいうとどういうことになりますか。特に、ダメな友の4番目から7番目まではそのとおりですね。酒を飲んでからむ人、いつも威張っている人、うそつき、欲張り、これはダメです。1番目は「偉い人」はダメ。2番目の「若き人」を「幼稚な人」「青2歳」とでもいえばわかりやすいかも。

3つ目の「病気しない人」がダメな理由を調べると、兼好は「いつも健康な人は病がちの人の苦しみを理解できない」だろうから嫌いだというのですね。なるほど。ところが、この解釈もいろいろあって、上の他に、「自分が死んで、あとに残された友は悲しい思いをするだろうから」という理解もあります。しかしそんなことまで考えて友人をつくるものでしょうか。

友にしたい人は……？。

徒然草をつれづれなるままに読んで見ませんか。なかなか面白いですよ。

私は、仕事上古代史が好きで、以前に勤めていた高校で、授業ではあまりふれることができなかった課外の『ゼミ』を開いたことがあった。10人ほどの生徒たちに「古事記・日本書紀」などについて説明したことが懐かしい。昨年も、卒業した生徒たち数名との朝勉で、「史記」の名場面である「鴻門之会」を話し合ったことがあった。

今でも思い出すことのできる鮮烈なインパクトを受けた書が3つある。その第一に記したいのは高木彬光著「成吉思汗の秘密」(1958)である。

これは、今もいつも問題になる「義経伝説」の頂点ともいえるべき「ジンギスカンは義経であった」ことを、名探偵神津恭介が論証する推理ものである。これを読むと、衣川で義経や弁慶が死んだというのはウソで、北海道の各地に残る義経主従のエピソードはエゾ地への逃避行の事実を物語っている。さらに恋人静(しずか)への思いをメッセージに託した「成吉思汗」命名の意味など、実に面白かった。

吉野で恋人静と別れた義経は、何年もたって(すなわちアジアを支配するジンギスカンになって)「吉なりて汗を思う」の意でこの字を当てたという。汗とは当時の人びとが身につけていた水干を指し、転じて当時の女性芸人、静自身をさす語だという。すなわち、蒙古の地で支配者として君臨することができた今、あの吉野で分かれた恋人の静を思うのである、という意味。

しばらくは友人とあのジンギスカンは義経のセカンドステージであった、などと議論しあっていたことを思い出す。

もち論これは作家の想像の所産であって史実ではない。

高校1年生の「新国語総合」の教科書に「アイムソーリー」という随想が載っています。筆者の画家古屋敬さんは40年前20歳でオランダに留学して以来、オランダで生活しているという女性で、

終戦の年に生まれ、私たちと同世代の方です。

話は、筆者が留学してまもないころ、買い物先で、ある白髪の老婦人から日本人であることを確かめられた後、戦争中インドネシアで、日本軍に土地を奪われ、一家離散の辛酸をなめ、その後家族は殺された。あなたは日本人として、こういう事実をどう思うか、と突きつけられたショックから書き起こし、とまどいながらも咄嗟に「アイムソーリー」と答えたが、果たしてこれでよかったのか、と考えてゆくという者です。

重たいテーマですが、最後は5月4日のオランダ終戦記念日に、再び戦争が起こらないことを願って、全国民が1分間の黙祷をささげるという習慣にふれ、爽やかだったので、ちょうど中国の反日デモのあった後でもあり、子どもたちと読んでみるのもいいかなと思ったのです。戦争について、平和について考えてゆくよい機会にもなるだろうと。

しかし、思った以上に重たくて、授業者である私の方がびびりがちになりました。その上、読み終わったところで、子どもたちに感想を聞いてみると、「よくわからない」とのこと。私たちの世代には深い感慨はあっても、彼らにはもっと戦争は遠いことのように。